

平成27年度 理窓会代議員総会 来賓挨拶

学校法人 東京理科大学理事長
中根 滋(46理工・電)



東京理科大学理事長 中根 滋

皆様こんにちは、中根です。

いつも大変お世話になっています。本日、平成27年度理窓会代議員総会が開催されますこと、心からお祝い申し上げます。

この1年間の理科大学の進捗を、「建学134年の道のり」「学校法人の統治」「経営成績」「中長期戦略」というテーマでお話しさせていただきます。

まず、「建学134年の道のり」についてです。

建学の精神は「理学の普及をもって国運発展の基礎とする」でございます。

1881年に年東京物理学講習所が創設され、1883年に東京物理学校となり、学制改革により1949年に東京理科大学となりました。そしてその際に理学部ができ、その後薬学部、工学部、理工学部、基礎工学部、そして経営学部ができました。山口は1987年に短期大学として発足し、1995年に山口東京理科大学になりましたが、将来を考え、2014年12月に山陽小野田市と協定し、公立法人化を目指すことになりました。さらに諏訪に短大を作ったのは1990年のこと、それが2002年に諏訪東京理科大学となり、現在も、同地域で有為な人材を輩出しているところです。現在法人としては、3大学11学部13研究科、1専攻科、3千人の教職員と2万人以上の学生を有しております。

初代校長の寺尾先生、初代の理事長本多光太郎先生の後、平川先生、橘高先生と続き前任の塚本先生は第6代にあたります。

理科大学は日本の経済と共に大きく成長を続け日本最大のサイエンス大学となりました。日本がグローバル化と人口減少で大きく揺れはじめた今

日、「21世紀に理科大は何を目指すのか」という大きな節目にあります。これまでに19万5千人の卒業生を輩出しました。内1万人が中学校・高校の教員です。現在日本の高等学校のうち理科大出身の校長先生は123人います。都内トップクラスの進学校の校長をはじめ、全国の有名な高校の校長を我々の同窓生が務めています。これが理科大プライドの原点であります。そして更なる発展を目指して、研究すなわち大学院を成長させ、加えて女子学生の大きい進出を希望しております。

次は「学校法人の統治」ガバナンスについてお話いたします。

学校法人東京理科大学の寄附行為のもとで、学長は理事長の命により大学の校務(教育と研究)をつかさどると規定されています。そしてこのたび、「大学の最終意思決定は学長にある」ということを本年4月1日付で明確にしました。例えば、これまでは各学部長については教授会が選挙をして選んできましたが、今後は学長が選任の最終判断をするということになります。選挙という手段によって順番に交代をしていくのではなく、将来を担う人材を開発し、育てていくという考え方に改めた訳です。国立大学は法人化した結果、本学を始めとする私立大学よりも進んでいるところが多々できました。注意深く先手を打ってゆく所存です。

理事長の仕事と学長の仕事について説明します。理事長の仕事は、大学の設置・法人の経営、経営基盤の国際競争力、「新幹線」の構築、Top-Down戦略です。将来のリーダーをどうやって育てていくのかです。学長の仕事は、大学の運営、教

育・研究の国際競争力、「在来線」の革新、Middle-Up戦略です。現在大学で行われていることを、革新・イノベーションすることが主な仕事です。

さて、「理科大の成績表」についてです。大学の、現在の成績です。

まず財務的なもの、学校法人東京理科大学の「収支」の評価は「A」で依然として良好です。設置大学別にみると赤字の所がありますが、全体で言いますと理科大は頑張っています。

「授業料依存度」は「D」です。収入源の約7割が授業料に依存しています。この評価は、日本の私立大学の中にあっては優秀ということになりますが、世界を見ますと、例えばMITは10%を切っているわけなので、そこに近づける努力が必要ということです。

「入口」である受験生の数は、山口と諏訪は長期的に定員割れ状態です。全体としては好調です。また「出口」である就職の評価は「A」です。出口は山口や諏訪も含めて、理科大が最も胸を張ってよいところです。理科大の学生は、就職は世界トップクラスでございます。ここも理科大プライドの強調点です。

「研究」は「B」です。ここはもうちょっと国際化していかなければならないです。「女性」については、女子学生は全学生の約2割しかおらず「C」評価で、女子教員はとて少なく「D」評価ですので、まだまだこれからというところです。「グローバル化」は、教員、学生とも「D」評価、ここはしっかり国際化をしていかなければなりません。「大学院」は、修士への進学率は「A」、学部から大学院への進学率は高い学部においては65%以上です。博士への進学率は「D」です。海外における先端の大学では6割が大学院、4割が学部というのが典型的なウィニングパターンです。理科大は8割が学部、2割が大学院なので、ここを構造改革していかないといけないと考えています。

出口について、先ほど胸を張れるところだと申し上げましたが、日経大学企業イメージ調査の「採用関与者が選ぶ理系人材を採用したいと思う大学」ベスト20において、理科大学は早慶上智東大を抜き、昨年第3位となりました。これを継続することが肝要です。

ARWU (Academic Ranking of World Universities) 大学の世界トップ500ランキングの中に、卒業生とノーベル賞という評価項目があります。受賞に関しては大学側のみでなく19万5千人の卒業生にも責任があるという事です。500の中には文系大学が多く、理系大学は47大学しかありません。ハーバード大はノーベル賞150個以上。MITは81個。ランキングでは東大が21位。慶応大が300番台で私立では一番。理科大は下の方ですがそれでも早稲田大の上にて私立で2〜3位です。理科大がトップ100に躍り出るのは少し時間がかかります。そこで「目指せエベレスト」となります。

最後に「中長期戦略」について説明いたします。

目指せエベレストということで、研究国際競争力、教育国際競争力、女性の活躍、収益事業に取り組んでいます。収益事業は(株)TUSホールディングスという事業会社を立ち上げ横倉 隆常務理事に会長になってもらいました。また取締役社長には経営学研究科修了で、ゴールドマン・サックス・アセット・マネジメント株式会社のヴァイスプレジデントであった片寄 裕市氏が、38歳で就任したばかりです。収益事業で理科大に貢献したいということでもあります。

また私は2015年5月24日に「賢者の選択」というテレビ番組に出演しました。グローバル化を視野に入れた大学改革等について話したもので、55分間の理科大特集です。番組のDVDは広報でも配付していますので各支部でもご覧ください。

人間は1920年代から長きにわたる挑戦の末1953年、エベレストに登頂に初めて成功しました。

「山は登ろうと思わなければ登れない」ということです。このパンフレットの絵も少し直してあります。藤嶋先生がシェルパに引っ張られるのではなくて、シェルパを追い越していくわけです。

以上、ご報告でございます。

本日は誠にありがとうございます。有難うございました。

